

「忘れないために 見に行く、聞きに行く」

《3月2-3日ふくしまスタディツアー》に参加して

主催：3.11 フクシマを忘れない 原発のない未来を TAMA実行委員会

ごみ・環境ビジョン21 運営委員 井上真紀子

たたり 神

おばあちゃん あれは なあに

あれは ゲンパツの お墓

青い 袋の中には

草や 花や 土や ミミズが 虫が ビセイブツが

ホウシャノウと 一緒に閉じ込められ

とてつもない ホウシャノウを あびながら

袋の中で うめいている

ほら 声が きこえるだろ

痛いよ 痛いよ 苦しいよ 苦しいよ

あのものたちは わたしたち

袋の中から 出されない

ごらん 黒いゴムで覆って

周りを鉄の板で 囲んでなぞしているが

なあに いずれ あのものたちは

袋を食い破って 外に出て

たたり神となって 動き出すさ

風になって 雨になって

けものになって 草になって

水になって 魚になって

生き物の中に 忍び込む

おばあちゃん たたり神は なくならないの

あれは にんげんが こさえたものだからね

お前は 遠くへ行きなさい

見たこと 起きたことを伝えなさい

わたしは ここで たたり神を まつろう

そして 考えなさい

なぜ たたり神が生まれるのかを

詩 関久雄



2011年、東北地方を襲った巨大津波と原発事故。「これほどの苦しみを味わった被災者の方たちのことは、絶対に忘れない！」そう誓ったのに、記憶はどうしたって薄れていく。「寄り添えていない」と思えてくる。でも、現地へ行き実際に見た景色、聞いた言葉は決して忘れないもの。忘れないために、自分に喝を入れるために、私は年に1度は津波、原発の被災地を訪れることにしています。今年は3月早々にごみかん役員のEさんも企画に関

わっている「ふくしまスタディツアー」があると知り、参加させてもらいました。

冒頭の詩を声に出して読んでみてください。その下で子どもたちが眠る我が家の屋根に、音もなく降り積もった「ホウシャノウ」。高圧洗浄で洗い流し、雑巾で拭いた。庭や田畑に落ちた「ホウシャノウ」は土を、草木や作物や小さな生き物もるともはがして、黒いフレコンバッグに詰め込んだ。こんなことをしただけで家族はここに住めるようになるのか。家も畑も家畜も仕事も、時には年老いた親まで残して逃げるべきなのか。苦渋の選択を強いられた人にしか書くことのできない詩だと思えます。

この詩を詠んだ関久雄さんは二本松市在住ですが、家族は今も山形県の米沢に避難しています。原発事故後は新潟県佐渡に保養所『佐渡へついの家』をつくり、子どもたちを放射能から守るプロジェクトを行っています。そして今回のツアーは、その関さんが案内役をしてくれた上に ①飯館村の村議会議員さん ②「青空保育たけの子」の園長先生 ③元福島原発作業員さんの3名が、ゲストとしてバスに乗り込んでくれたり、宿を訪れてくれたり…という至れり尽くせりの内容でした。

自分に降りてきたものは
運命と思って受け入れることにした

関久雄

多摩市を出たマイクロバスは12時過ぎに福島駅に到着。関さんと合流してすぐに向かった先は、福島駅からも見える信夫山です。市民の憩いの場でもあり、神社仏閣やお墓もある緑豊かな山の中腹に、関さんが詩に詠んだフ

レコンバッグが山積み(写真)。目につきやすい仮置き場から、双葉郡と大熊町の境にできた中間貯蔵所にフレコンバッグを移送する作業が進んでいて、量はかなり減っています。移送のため中通りから阿武隈山地を越えて浜通りに向かう道の整備が急速に進んでいるそうです。

2日間を共にした関さんからは多くの話をお聞きしましたが、強く印象に残ったのはむしろその人生でした。

それは、昨年訪れた大川小学校(跡地)の、津波から逃れて語り部となった只野くんと同様に、関さんもまた、



なんの罪もないのに故郷を追われ、差別される福島の人々の、いわれない苦しみをすぐれた言葉で後世に伝承するという使命をおびて、遣わされた人ではないかと思えたからです。

ちょうどこの3月の初めに、関さんの詩と、3.11以降の福島の人々や情景を写し続けた山本宗輔さんの写真をコラボした本『なじよすべ 詩と写真でつづる 3.11』が出版されました。冒頭の詩も収録されています。関さんの深い怒りや悲しみが、やさしい言葉と素朴な東北弁で昇華され、じわりと染みてきます。

「オーム真理教はサリンという毒を撒いて人を殺し、制裁を受けてその組織は潰された。ところが東電は30種類もの放射性物質という猛毒をばら蒔いたのに、なぜ誰も罰せられないのか」「国も県も事故後10年を機に全ての補償を打ち切るつもりだ。飯館村など8割が山。家の周りと耕地だけ除染しただけで『戻れ』と言う。戻れば補償しなくて済むからだ。だからなおさら自主避難した自分たちは『いつまでも被害者面するな』などと非難されている」
こうした気持ちを初めて詩というかたちにして講演会で読んだ時、会場の人が泣きだして驚いたそうです。関さんは、これからも福島の記録として詩を書き続けるそうです。
『なじよすべ』の詳細は16pに。ぜひお求めください。

やったふりの見せかけの復興では 村民は失望するばかりだ

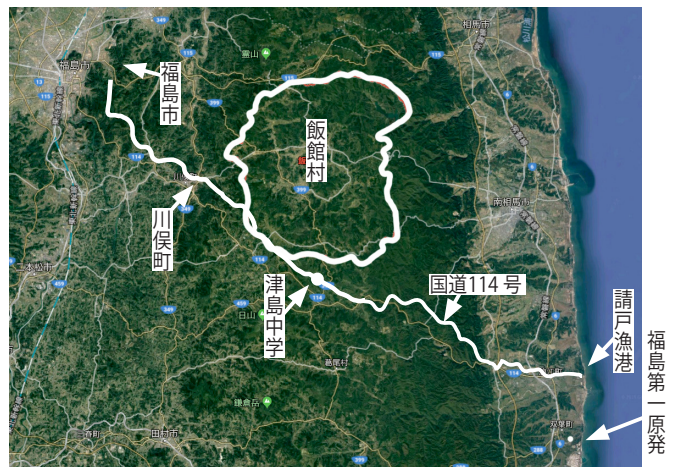
佐藤八郎



1人目のゲスト、飯館村議の佐藤八郎さんは、川俣町の道の駅からバスに同乗。佐藤さんから聞くお話は「除染が進みインフラも少しずつ整備され、復興が進む飯館村」とは真逆の飯館村の真実でした。

「飯館村は6年で村人を戻そうと最初から決めてた。宅地や耕作地などの除染は終わり、昨年3月末に避難指示が解除されたが、町には道の駅、郵便局、コンビニ、週2日午前中だけやってるクリニックがそれぞれ1軒、ガソリンスタンド3軒あるっつきり。4億かけた道の駅『まいでい館』では売物がない。人も来ない。これで帰れと言われても…」
「確かに線量は下がっているが、それはセシウムの半減期のせい、残りの何十種類もの放射性物質の動向はわからない。チェルノブイリ事故後にできた基準は『なし』にして、新しく福島後の基準を作った。それは、原発が再稼働する限り今後また起こるであろう原発事故への備えに他ならない」

「避難期間にばらばらになって核家族化した家族が、さあ元に戻ってまた大家族でって言われても難しいものがある。17%の村民が戻ったというが、実際は中通りに住



福島第一原発

んでいて、気分転換に昼間だけ飯館村に戻っている高齢者も多い。村の政治はもっと住民の気持ちにきちんと寄り添わないと、特に若い世代は失望し、戻ってこない。

今も一番心配な初期被曝の状況すらわからないままだ。まずは事故の徹底した検証をするべきだ」

「ぼくが66才になったら福島に戻れるね」 …と6才児が言うんです

辺見妙子

2人目のゲスト、NPO法人「青空保育たけの子」代表の辺見妙子さん。

辺見さんは福島市で野外保育を中心とした保育園を2009年に立ち上げましたが、軌道に乗ってきたところで原発事故が起こりました。

園児たちと自然農法で野菜作りや田植えをしたり、赤ちゃんの頃から森で遊ばせたり、雨の日も雪の日も野外で身体を動かしたり…そんな園なので、外遊びが制限される福島市ではもう運営できない、そう判断した辺見さんや保護者は、米沢市に遊び場を確保して、今は園児たちを車で、なんと毎日片道50km、無料送迎しているそうです。

原発事故後に生まれた子どもたちなのに、おとなが「あと60年もすれば廃炉になって放射能も落ち着くだろう」となど話しているのを聞いているのか、ある男の子が「僕が66才になったら福島に戻れるね」と言ったそうだ。

お母様が遺した着物を着て私たちのホテルに来てくださった辺見さん。優しいたずまいですが「ほんとに悔しい。やられっぱなしじゃられないです！」と、子どもの命を守ると決めた人の言葉は強くてカッコいい。

2日目は、気体状の放射性物質が雲のような塊となる「放射性プルーム」が事故原発から浪江町、川俣町、福島市へと流れた国道114号を逆に浪江町へと向かい、請戸港の復興現場などを見学しました。

右の写真は国道沿いの浪江町立津島中学校前での測定器。除染の要件0.23μS/hの40倍以上の10μSv/hを指しています。

そして、3人目のゲストについては16pの編集後記で。

